

平成 22 年 5 月 1 日現在

研究種目： 基盤研究(C)
 研究期間： 2007 ～ 2009
 課題番号： 19530129
 研究課題名（和文） 米国人知日派の戦前・戦中・戦後
 研究課題名（英文） American Experts on Japan from the Prewar to the Postwar Period

研究代表者
 井口 治夫（IGUCHI Haruo ）
 名古屋大学・大学院環境学研究科・教授
 研究者番号：80288604

研究成果の概要（和文）：本研究は、1930年代から1960年代までの米国の対日観と日米関係における知日派米国人の役割と貢献を考察している。平成14年度から平成16年度の基盤研究Cの研究課題であったボナー・フェラーズの世界観を共有するようになったケネス・コールグロブ、コールグロブの親友であったエルバート・トーマス連邦議会上院議員、フェラーズ、コールグロブ、トーマスが日米関係に深く関わっていった日米戦争開戦までの時期の米国の対東アジア政策が、論文と研究発表面における研究成果である。

研究成果の概要（英文）：This research project examines roles played by and contributions made by American experts on Japan from the 1930s to the 1960s. This project focused on the following individuals and ideas and the project has resulted in articles and presentations at academic conferences addressing these ideas and individuals: Kenneth Colegrove, who shared the world view of Bonner Fellers, Senator Elbert Thomas, who was a close friend of Colegrove and American foreign policy toward East Asia from the 1930s to 1941.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：政治学・国際関係論

キーワード：日米関係、アメリカ外交、知日派

1. 研究開始当初の背景

本研究課題は私が研究代表者であった下記の研究課題を拡大発展させるものである。基盤研究(C)平成14年度～平成16年度

「ボナー・フェラーズ准将と日米関係——米国共和党右派の世界観の事例研究」。2004年夏、フーヴァー研究所文書館でフェラーズ文

書の追加分の目録の作成を行った。従来からあった原本の目録は公開されているものの、追加分の原本に関する目録作成は予定されておらず、未来永劫なきさそうであるとのことであった。ところが、2005年夏からフルブライト基金で1年間米国で在外研究生活を過ごしていた時期、フェラーズ文書の新規分について、フーヴァー文書館は、目録を完成したことが判明し、フェラーズ研究の積み残し部分を効果的に推進できた。これを行う過程で、戦前から戦後の知日派米国人の世界観と日米関係における役割に関心を抱くようになった。

2. 研究の目的

本研究は、5人の米国人の1930年代から1960年代までの日米関係における役割と貢献を分析し、今まで殆ど紹介されていない日米関係の断面を描く研究である。戦後の知日派を理解するにはまずは戦前に遡って知日派の考えの連続性と非連続性を把握しなければならない。具体的には、次の人物を研究対象とする。(総括は最後の段落を参照されたい。)

ケネス・コールグロブ(Kenneth Colegrove) 平成14年度から平成16年度の基盤研究(C)の研究課題であったボナー・フェラーズ(Boner Fellers)と1945年以降世界観をかなり共有するようになったノースウェスタン大学の政治学者で日本の専門家である。終戦時ジョセフ・グルー(Joseph Grew) 国務次官と次の2点で意義投合していた —— 天皇制を利用する形で日本の降伏を促し、占領政策を進める、また、東アジアの戦後に共産主義が拡大することを警戒。赤狩りの時代フェラーズと同様マッカーシー上院議員を中心とする共産主義弾圧運動に加担し、オーエン・ラティモアを糾弾した。本応募研究は長尾龍一の『アメリカ知識人と極東』で描かれているオウエン・ラティモアを中心とするグループと思想的に対立していた知日派の人たちを主たる題材としている。

チャールズ・ファーズ(Charles Fahs)

コールグロブの弟子で日本の専門家、戦時中は米国の諜報機関であった戦略情報局(Office of Strategic Services)調査分析部東アジア部長。戦後は1960年代初頭までロックフ

エラー財団東アジア部長そして同財団文学部(Division of Humanities)の部長を歴任した。

エルバート・トーマス(Elbert Thomas) コールグロブの友人で1933年から1952年までユタ州選出の連邦上院議員(民主党)であった、当時の連邦議会には中国通のウォルター・ジャド(Walter Judd) 下院議員と元大学教授(東アジア史) マイク・マンズフィールド(Mike Mansfield) 下院議員(のちに上院議員、駐日大使)がいたが、当時の議会でこの3人しかいなかった東アジア情勢に詳しい議員のうち、トーマスが最も注目された政治家であり、また、米国の東アジア政策をめぐる議論で足跡を残したのであった。日露戦争直後から6年ほどモルモン教の宣教師として日本社会に溶け込み、トーマスとその白人の妻は日本で生まれた長女をチヨという日本人名をつけたのであった。トーマスは帰国後上院議員になるまでの時期の多くをユタ大学の東アジア研究の教授として教鞭をとっていた。

エドウィン・ライシャワー(Edwin O. Reischauer)

ファーズの友人で日本研究を専門とするハーバード大学教授で、ケネディー政権期の駐日大使。ライシャワーは大使時代ファーズを文化交流担当として大使館のスタッフに登用した。

マイク・マサオカ(Mike Masaoka)

トーマスが上院議員になる直前の時期に両者は出会い、日系人2世のマサオカは、ユタ大学入学前からトーマスにかわいがられていた。日米戦争海戦に伴い米国西海岸の日系人が連邦政府の方針で強制移動と強制収容の扱いを受けると、マサオカはこの状況の打開のためトーマスの水面下での支援をえながら奔走した。日系人社会の若いリーダーとなったマサオカは、戦時中日系人の米軍協力を推進し、また、強制収容生活終焉に尽力した。戦後、マサオカは、日系人の米国社会における地位向上に尽力し、また、ニューヨーク市マンハッタンを拠点に米国進出を始めた日系企業のコンサルティングをいった。マサオカの義弟は、現ブッシュ政権の前運輸長官ノーマン・ミネタ(Norman Mineta)である。(Mike Masaoka自伝*They Call Me Moses*参照。)

3. 研究の方法

米国に存在する一次資料を収集し、また、解説することにより本研究を行った。日本国内

では、関連しそうな一次資料の調査を収集を国会図書館などで行った。上記5人の資料は、下記にある。

ユタ州ソルトレイクシティ

ユタ大学図書館 マイク・マサオカ文書
ユタ州歴史資料館 エルバート・トーマス文書

イリノイ州エヴァンストン市

ノースウェスタン大学 ケネス・コールグロブ文書

アイオワ州ウェスト・ブランチ

ハーバート・C・フーヴァー大統領文書館
ケネス・コールグロブ文書

カリフォルニア州パロ・アルト市

スタンフォード大学フーヴァー研究所文書館
ボナー・フェラーズ文書

ニューヨーク州

ロックフェラー財団文書館 チャールズ・ファーズ文書

マサチューセッツ州

ハーバード大学文書館 エドウィン・ライシャワー関係文書
ボストン市ジョン・F・ケネディー文書館

米国ワシントンDC

米国立文書館

4. 研究成果

本研究課題の研究期間中、トーマスとコールグロブに関する論文を刊行することができ、また、ファーズ文書の資料収集はかなり行えた。一方、マサオカ文書とライシャワー文書の調査と収集は手つかずの状況となってしまった。しかしながら、コールグロブが戦後熱狂的に支持した、マッカーサー共和党大統領候補擁立運動と1937年から1941年の米国の東アジア政策に関する論文を刊行することができた。この2つの論文は、知日派の日米関係における役割を理解する上で必要な論文であった。トーマスの論文のもととなったものは、米国のアメリカ外交史学会における発表と、南山大学で開催された国際シンポジウムにおける日本人発表者としての報告であった。後者では、現在アメリカ外交史学会の会長をつとめる研究者（このシンポジウムの米国人招請研究者の一人）より高い評価を受けた。

コールグロブ研究については、NHKのプロデューサーの関心をよび、第281回2009年7月19日(日)放映 NHK えTV特集「日

本は世界でどう生きるのか ～プロジェクト JAPAN・国際アンケートを読みとく～」取材協力者となった。同番組のコールグロブに関する部分は、当方が提供した資料をもとに編成されていた。

なお、ファーズ、コールグロブ、トーマス、ライシャワー、マサオカの関係については、トーマスに関する2本の論文と、2007年3月に刊行したコールグロブに関する論文で概要を描いている。（井口治夫『Kenneth Colegrove and Japan, 1927-1946』『同志社アメリカ研究』第43号（2007年3月）1-31頁を参照）。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5件）

- ① 井口治夫、Kenneth Colegrove and Oyama Ikuo、*Doshisha American Studies*、No. 46、83-108、2010年、査読有
- ② 井口治夫、米国と満洲国—在奉天米国総領事館と日中戦争 1937—1941年、*軍事史学*、第49巻第3号、4-28、2009年、査読有
- ③ 井口治夫、共和党右派とダグラス・マッカーサー大統領候補擁立運動、*史林*、第92巻第5号、96-134、2009年、査読有
- ④ 井口治夫、Senator Elbert D. Thomas and Japan、*Journal of American and Canadian Studies*、No.25、75-105、2008年、査読有
- ⑤ 井口治夫、Elbert D. Thomas: Forgotten Internationalist Missionary, Scholar, New Deal Senator, Japanophile, and Visionary、*Nanzan American Studies*、No. 29、115-123、2007年、査読無

〔学会発表〕（計 3件）

- ① 井口治夫、戦間期の米国の対東アジア政策と構想、日本国際政治学会、2008年10月24日、つくば国際会議場
- ② 井口治夫、Elbert D. Thomas: Forgotten Internationalist Missionary, Scholar, New Deal Senator, Japanophile, and Visionary、*Nagoya American Studies Summer Seminar (NASSS) 2007*、2007年7月29日、名古屋市 南山大学
- ③ 井口治夫、Senator Elbert Thomas and U.S.-Japan Relations, 1941-1948、アメリカ外交史学会（The Society for Historians of American Foreign Relations）、2007年6月22日、米国ワ

シントン D.C 近郊バージニア州 .
Westfield Marriott Hotel

6. 研究組織

(1) 研究代表者

井口 治夫 (IGUCHI HARUO)

名古屋大学・大学院環境学研究科・教授

研究者番号 : 80288604

(2) 研究分担者

()

研究者番号 :

(3) 連携研究者

()

研究者番号 :